

中島敦「山月記」の世界

新井通郎

中島敦「山月記」は、『古譚』と題してまとめられた四篇（「狐憑」「木乃伊」「文字禍」「山月記」）のうちの一つである。「山月記」は、「狐憑」「木乃伊」に先行して、「文字禍」とともに『古譚』の題のもとに『文學界』第九卷第二号（一九四二〔昭和一七〕年二月／一三八―一四四頁）に発表されている。その後、『古譚』四篇として、第一創作集『光と風と夢』（一九四二〔昭和一七〕年七月／筑摩書房）に収められた作品である。「山月記」の制作時期は、中島敦が南洋庁赴任前（一九四一年六月二八日）、深田久彌に『古譚』四篇を託していることから、南洋庁赴任以前と考えられるが、明確にはわからない。

「山月記」の先行研究は、中島敦の作品の中でも最も多いといえる。その数は群を抜いている。『古譚』の他三篇は、単体研究が数えられるほどであるにも拘わらず、なぜ「山月記」単体の研究だけ数多く見られるのか。一要因として、高等学校の教科書に多く取り上げられ、多くの読者に親しまれている点が挙げられる。しかし、これはあくまで一要因に過ぎない。やはり、作品自体に惹きつけるものがあるからこそ、多くの先行研究を生んだのだろう。中島敦研究は、「山月記」を軸に据えて論じられることが多いが、なぜここまで「山月記」を中心に進められてきたのか。中島敦研究を行っていく上で、この問題を忘れてはならない。

本稿は、今まで論じてきた『古譚』三篇の各論^①とともに、『古譚』総論研究へ結実させるべく「山月記」単体について論じるものである。まず、一つ一つの作品に言及をしていき、その後『古譚』という範疇での総論研究へ結実させるべきであるという考えのもと、『古譚』という枠組みを外し、「山月記」について考えていく。

中島敦「山月記」に関する先行研究をみる。本稿が「山月記」研究においてどのような位置にあるものなのか、先行研究を概観することを通して明確にするためである。

「山月記」に関する先行研究の数は膨大である。中島に対する同時代評や評論においても「山月記」を中心に述べられることが多い。このことから多くの人に「山月記」が読まれてきたことがわかる。本稿において、膨大な「山月記」に関する先行研究すべてを取り上げることが不可能である。そこで本稿には、「山月記」に対する研究の軸となっている論稿を中心にまとめることにする。以下に挙げる論稿を概観することで、「山月記」研究の流れをほぼ理解できると考えるからである。

「山月記」に対する初期の研究から見ていく。松村明敏氏は、国語教育の立場から、李徴の「異常な性格の欠陥が李徴を虎に化したものであり、この事を何故今まで気付かなかったのかと、痛切極まりない懺悔」を「自己を知らなかつた嘗ての愚かさ」であるとし、「醜悪な性情というものが、どういう形をもって人間の健康な性情を狂わせ、蝕み、翻弄しているか、そして、畢竟これを制御し自己の健康な純粋に人間的な性情の支配下におくべきかの、人間永遠の基本的課題を提示したものに外ならない」としている。「人虎伝」との比較研究においては、山敷和男氏や高田瑞穂氏の指摘が示唆に富む。

「山月記」研究は、佐々木充氏と鷺只雄氏の論争によって一つの山場を迎える。佐々木充氏は、「山月記」が『古譚』の中的一篇であり、『古譚』総題が象徴する「物語りの奇異性・非現実性の構成を一方の目的とした作品である」とし、『古譚』四篇が「文字・言葉」をめぐる展開し、「山月記」は、「文字の新しい秩序を発見し、そこに己れの

生命を铸こむ人間——詩人たらんとしてなりえなかつた人間の悲劇が語られ」た作品としている。「山月記」研究において、「伝統的な小説理解の方法である「私小説的自我」の論」が効果的実利的でないとする立場をとっている。一方、鷺只雄氏⁽⁶⁾は、「古譚」四篇は中島を執拗に苦しめ、作家として立つ上で絶望的な挫折感を味わせた宿命的な「自我」をテーマとして形象化された作品」とし、「作家として身動きのとれなくなってしまう」「形而上学的不安」をテーマとした作品」であるとしている。そして、「山月記」は、「おのれの尊大な自我故に虎と化し、理不尽な生きねばならぬ男の悲劇を通して芸術に執する者の苦悩を描いたもの」であると述べている。これら二人の説の相違により、互いの反論を生む。しかし、これら二人の説が、「山月記」研究の土台となつていくことは言うまでもない。

また、濱川勝彦氏⁽⁷⁾は、「山月記」の構成論、「人虎伝」との相違点、「山月記」の表現、特に逆態接続の考察から、「山月記」において繰りひろげられる詩的空間は、「狂」の世界そのものであるが、その「狂」の状態をもたらしたものは、詩人・李徴の生を引き裂く二律背反という苛酷な様相」であると指摘している。木村一信氏⁽⁸⁾は、李徴の状況設定と李徴が虎に変身した原因を告白する場面の考察を中心に、「山月記」は、詩業にとりつかれたばかりに自らの存在を危くし、果ては〈滅び〉への恐怖にとらわれてしまった主人公が、詩に対する限りない執着を抱きながらも、そのような地点に辿りついた自己を批判し、否定を試みる物語である」としている。前田角藏氏⁽⁹⁾は、「山月記」は、俺＝鬼才という思い込み＝幻想に翻弄された詩人李徴を虎に変身させ、またその悲劇の現場に友人＝人間＝袁修を立ち合わせることで、人間の自我幻想そのものを裁くという非情な劇である」としている。木村瑞夫氏⁽¹⁰⁾は、李徴が〈なげ虎と化したのか〉を述べた三箇所を、「〈神〉」に対しての意識を述べたもの」と解し、「山月記」を「〈神〉」に対する李徴の意識の表出としての価値をもつと同時に、まさに精神まで完全に虎に化そうとする間に、皮肉にも初めて真に人間としての心を得るといふ悲劇性を読者に訴える」作品であるとしている。山本欣司氏⁽¹¹⁾は、李徴の悲劇は、「自

分が「すつかり人間でなくなつて了ふ」時を目の前にした彼が、「性情」に振り回され「過去」・才能を空費したと考へ、深い後悔に身を苛まれていること。おのれを襲った不条理な事態をも、「性情」によるものと述べ、自分を責めていること」を挙げています。そして、李徴の語りのモノロogue性について言及している。

以上、膨大な先行研究の中から、主要な論稿を挙げ、「山月記」研究の概観を試みた。「人虎伝」との対比や、李徴の虎への変化の問題、李徴の悲劇性など、核となる視点から様々な見解を示している。

本稿では、素材となる「人虎伝」を踏まえながら、李徴の自己回顧の過程を考察していく。「山月記」における自己の問題に対し、新たな座標軸で言及する。

三

中島敦「山月記」は、李景陵撰「人虎伝」をモチーフに作られている。既に、先行研究において指摘のあるところである。「山月記」における「人虎伝」との関係を見る場合、どのような「人虎伝」の諸本を見るべきであろうか。すでに指摘のなされていることであるが、論者の立場を明確にするため述べたい。

氷上英廣氏からの書簡⁽¹²⁾に次のように記されている。

「光と風と夢」を頂戴した。いま家中で読んでゐる。(字がむづかしいさうだ) 山月記は漢文大成の「晋唐小説」にあるものだらう。いつか僕も、小説になほそうと思つて二三枚書いたことがあり、不思議な気がした、(四三

四頁)

氷上英廣氏の指摘として「漢文大成の「晋唐小説」とあることから、「山月記」の研究において『國譯漢文大成』文學部第一二巻(監谷濫譯並註／國民文庫刊行會／一九二〇年十二月／書下し文：四九五〜五〇二頁、原文：一九六

（一九九頁）の「人虎伝」をもとに分析することが最善といえる。本稿においては、『國譯漢文大成』所収の「人虎伝」の書下し文をもとに考察をする。

中島敦「山月記」の内部を考察していく。場面ごとに「李徴像と李徴の失踪」、「袁慘との出会いと会話」、「袁慘との別れ」に分けて考察する。

第一に、「李徴像と李徴の失踪」についてみる。「山月記」の冒頭は、次のように始まる。

隴西の李徴は博學才穎、天寶の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。（二二頁）

李徴の人物像を示している。李徴は、「博學才穎」と學問に通じ秀でた才能を持つ一方、「狷介」と他人との協調性がない人物として設定されている。「山月記」の冒頭は、「人虎伝」の冒頭⁽¹³⁾と比較すると、簡潔かつ明快な冒頭となっている。冒頭で読み手に対し、主人公の人物設定を必要かつ十分に示すことは中島の常套ともいえるものである。

才能はあるが協調性のない李徴は、官を退き、「人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた」とあるように、詩家を目指す。李徴の目指す方向性の転換は、「賤吏」のままであることを許すことができないプライドをもった人物ゆえである。李徴は、自己の才能に自信を持ち、自我の強い人物といえる。

自信はあっても、詩家として名をあげることが簡単なことではない。李徴の生活は苦しくなってくる。李徴の風貌は、「容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊頰の美少年の俤は、何處にも求めやうもない」とあるように、変わり果てていく。小説が始まってまだ間もないにも拘わらず、主人公は変化していくのである。「山月記」のストーリーはめまぐるしく展開していく。

生活が苦しい以上、働かなくてはならない。ごく当然なことである。そこで、李徴は、「數年の後、貧窮に堪へず、

妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった」と、働くことを決意する。自我の強いプライドの塊である李徴にとって、この決断が一世一代のものであることがわかる。そして貧窮に迫る思いとともに、「口の詩業に半ば絶望したため」と描かれる。この場面から自己の才能に自信がある李徴が絶望したことがわかる。この時点で詩家としての限界を認めているのである。このように李徴の詩家としての限界が描かれる一方で、李徴が詩家として名をあげるためにどのようにしていたのかに関する描写は全くない。詩家として何をしていたのかわからないにも拘わらず、読み手は李徴の限界に直面するのである。読み手は、ただ詩家としての限界を感じ改めて職に就いたという李徴のこの決断に対する思いの深さが計り知れないことだけを、否応なく受容させられるのである。つまり、「山月記」においては、李徴が作詩をしていたことはわかっていても、詩家としてどのように活動していたのか、その詳細に関する描写がないのである。詩家としていた空白の時間を経た結果、李徴は限界に達するという時間的空白を巧みに用い展開されている。

地方官吏で働くこととなる李徴は、気にもとめなかったような者たちの下で働くことになる。自我の強い李徴にとって、この上ない屈辱であろう。下と思っていた人物の下に自分がいる。詩家としての自信、官吏としての自信、すべてを打ち崩されていく。ここまでを見てきて分かるように、李徴は、すべてが自分中心で進んでいく。他者を受容するということをしない。李徴の「なぜ？」は、自分をどうしてわかってもらえないのかという懷疑である。自己基準の中で、自己を追いつめていく。李徴の境遇が自己への思いの強さゆえであることを、李徴はわかっていない。そして、李徴は発狂する。「山月記」では次のようである。

公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、遂に發狂した。或夜半、急に顔色を變へて寢床から起上ると、何か譯の分らぬことを叫びつつ其の儘下にとび下りて、闇の中へ駈出した。(二二二〜二三頁)

李徴は、発狂し失踪する。詩家としての自己の限界から、発狂という形で自己の崩壊をする。これは李徴が自己を受容できなくなったためだろう。李徴の性格が、李徴を発狂へと導いた。発狂した李徴は、闇に消えていく。どこに向かったのかはわからない。「その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった」と、李徴の存在はわからなくなる。李徴の人間の姿での描写はここで終わる。このように「山月記」の前半部で、李徴の人物像から失踪までの一つのカタストロフィとして、結末をみせている。

「李徴像と李徴の失踪」は、自己を理解し得なかった者のカタストロフィとして完結している。しかし、「山月記」はここで幕を閉じない。「山月記」は、〈限界〉から〈崩壊〉を迎えた者のその後を描こうとした作品ゆえである。李徴がなぜ博学であるにも拘わらず、詩家として限界を迎える人物であったのか。以後、虎という異類に変わり、他者との交流によって、視点が変わり、自己を客観的にみることができるようになる。自尊心の塊である李徴の自己回顧を可能にする。畢竟、李徴の発狂は自己の人間性への気付きへと結実させんとする契機となっている。失踪の場面は以後のストーリー展開への橋渡しとして考えられているのである。

四

第二に、「袁愖との出会いと会話」について考察する。

袁愖は、勅命により出かける途中、商於の地に泊まる。商於において、昼以外では道に人喰虎が出ることから、朝早く出ようとする袁愖に対し、駅吏は出発を待つように言う。しかし、袁愖は、駅吏の言葉を斥け、出発する。出発をした袁愖は、次のように虎と出会う。

残月の光をたよりに林中の草地を通つて行つた時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あはや袁愖

に躍りかかるかと思えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の聲で「あぶない所だった」と繰返し呟くのが聞えた。(二三頁)

袁修と虎との出会いである。駅吏の言う通り、虎が出る危険な場所である。しかし、普通の虎とは異なる。人間の声で呟くことができるのである。虎の声をはつきりと袁修は聞いている。その声に袁修は聞き覚えがあった。そして、すぐにその声の主が、李徴であると思いたることになる。李徴と袁修の関係は、「袁修は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかつた李徴にとつては、最も親しい友であつた」とあるように、李徴にとつて数少ない友人の一人である。袁修の問いかけに対し、李徴は答える。李徴の声は、旧友との突然の出会いから、「しのび泣きかと思はれる微かな聲が時々洩れるばかり」とあるように、声を出すのに躊躇している。自身の変化を友人に見せたくないというプライドと、それでも旧友に会いたいと思う、相反する気持ちの葛藤ゆえだろう。虎と成り果てた今も李徴の時の性格が息づいていることを示している。このことから袁修と虎との出会いは、つまり、袁修と李徴の出会いとの場面となつている。

この出会いを袁修は受容している。虎が話すことなど一般的にあり得ない。あり得ないことが起きている怪異的な場面に對して恐怖すらしなのである。温和な袁修の性格設定が、何事にも動じない袁修とを結び付けている。つまり、李徴と対比的な人物として、袁修を作品に登場させている。このことから、李徴にないものを持つ人物として、李徴の人間性の欠落部分を完備した、成功者として袁修を登場させているといえるだろう。

なぜ、李徴が虎に変化したのかが明らかになる。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊つた夜のこと、一睡してから、ふと眼を覺ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでゐる。聲に應じて外へ出て見ると、聲は闇の中から頻りに自分を招く。覺えず、自分は聲

を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走つてゐた。何か身體中に力が充ち満ちたやうな感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた。氣が付くと、手先や腕のあたりに毛を生じてゐるらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となつてゐた。(二四頁)

先に考察した李徴の失踪がどうして起こつたのかがわかる。「發狂」とされた行動は、誰かの招きによつて起こつたとされる。誰の招きであるのかはわからない。ただ、その招きを信じ、李徴は突き進む。その姿を、「發狂」と捉えられたのだろう。そして、氣がついたときには虎になつていたのである。不可思議な出来事は、全容解明には至らない。なぜ虎に化したのか。誰が李徴を招いたのか。判然としない。李徴自身が、なぜ虎に化したのかというプロセスを理解していないために、漠然としてしまう。ここでは、なぜ変化したのかわからない、あやふやな記憶しか残っていない李徴像の提示に、重きが置かれている。このことは、李徴自身がなぜ変化したのかわかつていないことを示そうとしているのではないだろうか。

虎に化した李徴の自己受容の過程を追う。虎になつたことを信じることができなるところから始まり、虎になつたことは夢ではないかと考えるに至る。そして、虎になつたことを受け入れざるをえないことだと現実を受容するといふ心理変化となる。虎に化すという不可思議な出来事を受容できないのは、誰においてもそう思うごく自然な心理であろう。この不可思議な出来事を受容せざるを得なくなつた李徴の落胆は、計り知れないものといえる。この奇怪な出来事を受容よりも李徴を苦しめたものがある。それは、李徴の自己懷疑によつてもたらされた。自我の強い李徴が、自己の身にふりかかったことに対し懷疑を見せる。なぜ自分自身の身にこのようなことが起きたのか。なぜ自分だけがこのようなことになつたのか。李徴自身に起きたことへの、自己懷疑が李徴を苦しめているのである。

李徴の自己受容は、二律背反的である。「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」としながら、「自分は直ぐに死を想うた」とする。すべてを受容して生きていくのがさだめであると思つてゐるのに、死のうと思う。生きもののさだめが、李徴にとつて受け入れ難いものであることを如述に表している。確かに、虎になつた事實は認めてはいる。しかし、なぜ虎になつてしまつたのかという自己懷疑に苛まれてゐる李徴であるといえる。李徴の自己は、虎になる以前と同様、自信家で自我の強いままである。虎になつても、自己の問題への気付きを全く見せていない。

虎に化した李徴は、虎としての凶暴さを持ち得た自己と、人間李徴としての自己との間を行き来する。虎としての本能が現れている時、いわば、李徴は自己喪失の状態である。そのような中でも、李徴の自己認識は、人間李徴の自己において「複雑な思考にも堪へ得るし、經書の章句を誦んずることも出来る」と、自己が決して劣つていないことを提示する。自己喪失という自己を見つめる機会を得ても、李徴は決して頑強な自己の問題に対し気付かない。

自己への愁いは、「人間の心で、虎としての己の殘虐な行のあとを見、己の運命をふりかへる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい」と、自己懷疑に満ち溢れている。なぜ、どうしてをずっとひきずつてゐる李徴である。日に日に虎としての自己に支配されていく李徴は、次のように考える。

己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己は、しあはせになれるだらう。なのに、己の中の人間は、その事を、此の上なく恐しく感じてゐるのだ。あゝ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思つてゐるだらう！ 己が人間だつた記憶のなくなることを。(中略) 所で、さうだ。己がすっかり人間でなくなつて了ふ前に、一つ頼んで置き度いことがある。(二五頁)

李徴は、完全に人間李徴としての自己喪失をした方が、「しあはせ」になれると考える。しかし、一方では自己喪

失することに恐怖を感じている。李徴の言動は、すべてにおいて不安と恐怖によって整合性を失っている。虎に自己を奪われることは理解している。しかし、その事実を受容することができずにいるのである。

このような状況下、李徴は、袁愴に頼みごとをする。袁愴に、李徴が作った詩を「我が爲に傳録して戴き度い」と願う。虎に化した現在も、「自分は元來詩人として名を成す積りである」と、詩家としてのプライドを持ち続けている。作中では、詩家として名を成そうとしてどのように活動をしたのか、その描写はない。努力の軌跡がない中で、詩家として名を残したいと描くことで、李徴がいかに固執していたことであるのかを浮き彫りにしている。そして、詩を残す理由として、「二人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のものを、一部なりとも後代に傳へないでは、死んでも死に切れないのだ」と打ち明ける。虎に自己を奪われようとする時、李徴が第一に頼むべきものは、詩を残すことである。「發狂」した時の李徴の自己と全く変わらない。自信に満ち、自我の強い、プライドの塊の自己である。自分本位でしか物事を考えることができないままである。自我を憎むことなど全く考えていない。自分の運命を憎んでいる。この場面においても、人間李徴は外形のみの変化で内面の変化ができていない。

袁愴は、李徴の頼みを受け入れる。袁愴は、李徴がなぜ第一に詩を残そうと考えたのか言及はしない。このときの袁愴の心理は全くわからない。李徴の思いを受け、李徴の発する詩を袁愴は部下に書き取らせていく。李徴の詩は、才能の非凡さを感じさせるものである。しかし、袁愴は、「作者の素質が第一流に属するものであることは疑ひない。しかし、この儘では、第一流の作品となるのには、何處か（非常に微妙な點に於て）缺ける所があるのではないかと」感じている。評価している袁愴の詩の才能はわからない。だが、少なくとも科擧の試験に合格できる才能を持つ者である。詩を全くわからない者の評価ではない。たしかに袁愴の主観的な意見に過ぎず、この評価を軽視する考え

もできよう。しかし、一流の詩をたくさん読み、勉強をしたことのある者の評価として、一つの評価として成立するものであるといえるのではないか。李徴の詩には「何處か（非常に微妙な點に於て）缺ける所がある」のだと捉えるべきだろう。

李徴は、一通り詩を述べる。そして、自嘲的に次のように言う。

羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれてゐる様を、夢に見ることがあるのだ。（二六頁）

李徴の思い描く詩家として成功した姿といえる。虎に化してもまだ夢として見る。自信に満ちた李徴が成しえることができなかった、現実への批判である。虎に化しても変わることはない自己が、まさに具現化された表現といえる。自嘲する李徴は、虎に化した思いとして次のような即席の詩を作る。

偶因狂疾成殊類

災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵

當時聲跡共相高

我爲異物蓬茅下

君已乘輶氣勢豪

此夕溪山對明月

不成長嘯但成嘯¹⁴

（二六～二七頁）

李徴の作った詩は、「人虎伝」と全く同じ詩を用いている。しかし、「人虎伝」と同じ詩であっても、その重みを変えている。「人虎伝」では、袁愴による詩の評価はない。また、李徴の詩家として繁栄する夢の描写もない。中島の付加である。この二つのエピソードの付加により、「人虎伝」と同じ詩であっても、読み手の受ける李徴の度合いが異なる。「當時聲跡共相高」と、かつての互いの秀才ぶりを詠み、「不成長嘯但成嘯」と自己の没落を詠む。「山月記」における詩では、才能はあったかもしれないが、詩家として足りない何かがあったことに気付いてない李徴の姿と、詩家として繁栄できず、虎へと化した無念の思いが込められている。この意味合いの差異により、「山月記」が「人虎伝」とは異なる作品であることを明確にしている。この詩を効果的に用いていることから、「山月記」における「人

虎伝」の受容とその展開が成功しているといえるのではないか。

なぜ、虎に化した運命となったのかを振り返る。「考へやうに依れば、思ひ當ることが全然ないでもない」と、自己回顧への姿勢を見せる。自信に満ち、自我の強い李徴にとって、大いなる前進である。なぜ虎に化す運命となったのか、李徴は切々と語る。

人間であつた時、己は努めて人との交を避けた。(中略)己は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所爲である。(二七頁)

自己の今までの態度を顧みている。李徴は自身の「狷介」な性格を自覚する。李徴が虎に化した運命は、李徴の自己を形成した「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」のためであるという考えに行き着く。「臆病な自尊心」とは、才能を自負しながらも、他人に自分も見てもらい評価してもらふことを拒む態度のことといえる。「尊大な羞恥心」とは、自分ではできるのだからという傲慢さゆえに、人との交わりを恥ずかしく思い拒絶する態度といえる。李徴の自己の強さが、虎へと変化していくことになった自己の運命に起因するものであるとしている。この場面において、李徴は自己の性格への気付きを遂げるのである。

李徴が今まで気付くことができなかつた自己を回顧するきっかけは何であろうか。旧友袁蓼との出会いを通し、ほとんど人と交わることのなかつた李徴が他者と比べる契機を得た。たとえば、李徴の一方的な会話とはいえ、袁蓼という他者とふれあふことで、自己との差違が明確になっていったといえる。そして、他者交流の中で、自嘲し、現在の自分への悲観を詠んだ詩を作ることを通して、李徴の今まで凝り固まっていた考え方が解け、違う視点を生むことにつながつたのではないだろうか。「考へやうに依れば」という、今までと考える視点を変えてみたことによること

表れといえるだろう。

李徴は、今までの自分への後悔をする。李徴自身が、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、その結果虎へと化した。「才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰とが己の凡てだった」と、自己の「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」に対して悔やむ。虎となった事実は受容できても、なぜ自分が虎に化したのか理解できていなかった李徴は、自己がすべてを導いたことを合点する。考える視点を変えることによって見えた自己ではある。しかし、まだ詩家への自己の固執が見られる。「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という李徴の自己の一面は理解し得た。だが、一側面だけを理解するだけでは本当の自己への気付きとは言い難い。自分本位の姿勢にあることを理解していない状態である。

「袁惨との出会いと会話」は、なぜ自分が虎に化したのかという自己懷疑から、自己の問題に対する気付きの途中で終わる。袁惨という李徴の旧友を登場させることによって、他者と比較する視点を李徴に与えることに成功している。そして、虎に化した後に旧友袁惨との会話を通じ、自我の強い李徴に自己回顧をさせることへと結実させている。

五

第三に、「袁惨との別れ」について考察する。

李徴は、自己が虎に奪われ、戻ってしまう時が近づく。李徴と袁惨が別れなければならない。別れ間際の最後に、李徴が袁惨に対し、次のような頼みをする。

我が妻子のことだ。彼等は未だ號略にゐる。固より、己の運命に就いては知る筈がない。君が南から歸つたら、己は既に死んだと彼等に告げて貰へないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。厚かましいお

願だが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないやうに計らつて戴けるならば、自分にとつて、恩侍、之に過ぎたるは莫い。(二八頁)

李徴が自分以外の者への配慮を見せる。今まで、自分本位の姿勢を崩さなかつた李徴が、他者への思いを伝える。この言動発話に至つた契機はわからない。最後に伝えなければならぬことを考え出した時、家族のことが思い出されたのかもしれない。この他者への配慮は、自己の最も欠落した部分を理解していくことへとつながる。そして、李徴は「本當は、先づ、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら」と、自己のすべてを理解する。李徴の自己の問題への気付きが完結する。なぜ、自分が虎に化してしまつたのか。自分本位な人間であつたために、虎に化してしまつたのだと、自己完結を迎える。

さらに、李徴は袁修への配慮も見せる。自身が袁修であるとはわからず、襲いかかつてしまうことを避けるための策を講ずる。自分本位の李徴の自己は溶解し、新たな自己を見せる。そして、李徴は虎に化した姿を見せる約束をし、袁修と別れる。袁修との約束の通り、丘の上について一行が振り返つた時、虎の姿の李徴が躍り出、咆哮し、消えていく。

李徴は自己への気付きを完結し、他者への配慮を見せ、プライドの塊であつたにも拘わらず己の醜態をさらし、幕を閉じる。李徴の自己の変遷が怒濤のごとくなされていく。

「人虎伝」では、次のようにさらに続いている。

後南中より回る。乃ち他道を取り復た此に由らず。使を遣し書及び賻贈の禮を持ち徴が子に訃せしむ。月餘にして徴が子號略より京に入り、修に詣りて先人の柩を求む。修已むを得ず具に其傳を疏し、遂に己が俸を以て均給す。徴が妻子飢凍を免る。修、後、官兵部侍郎に至る。(五〇二頁)

「山月記」では、「人虎伝」の結末が削除されている。「人虎伝」の結末とは異なる「山月記」の結末は、中島の取捨選択の跡といえる。「山月記」では、李徴の自己への気づきに重きを置いたために、その後の後日譚は削除したのだろう。このことから、「山月記」は、李徴の自己の描写を軸に据えて作品化しようとしたのだといえるのではないか。

「袁蓼との別れ」において、李徴は自己への気づきの完結を迎え、今までの李徴ではあり得なかった他者への配慮を見せ、自己の恥部を見せることを厭わない者へと変化させている。李徴は「發狂」という形から、自己への気づきという自己回顧を実現させたのである。

六

中島敦「山月記」は、李徴の失踪という形で、自己を理解し得なかった者のカタストロフィとして小完結し、〈限界〉から〈崩壊〉を迎えた李徴のその後を描こうとした作品なのである。なぜ、〈限界〉から〈崩壊〉を迎えることになったのか。読み手は前段階から理解していても、主人公李徴は理解していない。虎に化すことで、様々な経験をし、作品における因果を効果的に用い、自己の問題への気づきへと結実させている。李徴に〈限界〉から〈崩壊〉とすることが起きた事実から、その理由探しを展開している。換言すれば、Aという自己であるからBという結果となったという形でなく、Bという結果となったことをBという状況下で考え、初めてAという自己ゆえだったと気づく逆コースで描かれている。

「山月記」では、〈限界〉から〈崩壊〉を迎えた人物描写の新たな方法を用いて作品化を試みている。「人虎伝」をモチーフにしながらも、李徴の自己への気づきの物語へと、中島の作品として成立している。また、ストーリーの展

開として、今までにない構造へのアプローチをしている。「山月記」における新たな試みは、評価してよいのではないか。

『古譚』総論における「山月記」の位置付けの言及は、改めて述べることにする。

註

- (1) 「山月記」を除く『古譚』三篇については、拙稿「中島敦「狐憑」の構造」(『二松學舎大学大学院紀要 二松』第十八集／二〇〇四年三月／一一一〜一三七頁)、「中島敦「木乃伊」の構造」(『二松學舎大学大学院紀要 二松』第十九集／二〇〇五年三月／一三一〜一五二頁)、「中島敦「文字禍」の世界」(『二松學舎大学大学院紀要 二松』第二十集／二〇〇六年三月／一一七〜一三九頁)を参照して頂きたい。
- (2) 松村明敏「中島敦の「山月記」」(『國文學 解釈と教材の研究』第三卷第八号／學燈社／一九五八年七月／一一八〜一二〇頁)
- (3) 山敷和男「人虎伝」と「山月記」(『漢文学研究』第八号／一九六〇年六月初出／勝又浩・山内洋編『中島敦「山月記」作品論集』／クレス出版／二〇〇一年一〇月／四〇〜四八頁)
- (4) 高田瑞穂「山月記(一)」(『國文學 解釈と教材の研究』第五卷第一号／學燈社／一九五九年二月／一三八〜一三九頁)、高田瑞穂「山月記(二)」(『國文學 解釈と教材の研究』第五卷第三号／學燈社／一九六〇年一月／一四六〜一五一頁)、高田瑞穂「山月記(三)」(『國文學 解釈と教材の研究』第五卷第四号／學燈社／一九六〇年二月／一四二〜一四七頁)、高田瑞穂「山月記(四)」(『國文學 解釈と教材の研究』第五卷第五号／學燈社／一九六〇年三月／一四七〜一五一頁)
- (5) 佐々木充「山月記」——存在の深淵——(『中島敦の文学 近代の文学・一〇卷』／桜楓社／一九七三年六月／一一〇〜一二六頁)
- (6) 鷺只雄「古譚」——物語の饗宴(『中島敦論——「狼疾」の方法』／有精堂／一九九〇年五月／二四三〜二六八頁)
- (7) 濱川勝彦「山月記」——二律背反と逆説の世界——(『中島敦の作品研究』／明治書院／一九七六年九月／一一七〜一

五〇頁)

- (8) 木村一信『山月記』論——〈滅び〉への恐れ——(『中島敦論』／双文社出版／一九八六年二月／一〇七〜一三二頁)
- (9) 前田角藏「自我幻想の裁き」——『山月記』論——(『国語と国文学』第七〇巻第一〇号／東京大学国語国文学会／一九九三年一〇月／四二〜五四頁)
- (10) 木村瑞夫「中島敦『山月記』論——李徴にとつての〈神〉——」(『論攷 中島敦』／和泉書院／二〇〇三年九月／九二〜一一六頁)
- (11) 山本欣司「後悔の深淵——『山月記』試論——」(『日本文学』第四七巻第一二号／日本文学協会／一九九八年二月／一九〜二八頁)
- (12) 「氷上英廣書簡三五」(『中島敦全集別巻』／筑摩書房／二〇〇二年五月／四三四〜四三五頁)。昭和一七年八月九日消印。葉書。

(13) 「人虎伝」の冒頭は次のように始まる。

隴西の李徴は皇族の子にして、號略に家す。徴少くして博學、善く文を屬す。弱冠州府貢に従ふ。時に名士と號す。天寶十五載春、尙書右丞楊元の榜下に於て進士に登第す。後數年、調せられて江南尉に補す。徴性疎逸、才を恃んで倨傲なり。跡を卑僚に屈する能はず。嘗に鬱鬱として樂まず。(四九五頁)

(14) 詩を書下すと次のようになる。書下しは、『國譯漢文大成』(前出／五〇一頁)の書下し文による。

(原文)

(書下し文)

偶因狂疾成殊類	災患相仍不可逃	偶々狂疾に因つて殊類と成り	災患相仍りて逃るべからず
今日爪牙誰敢敵	當時聲跡共相高	今日爪牙誰か敢て敵せん	當時聲跡共に相高し
我爲異物蓬茅下	君已乘輶氣勢豪	我れ異物となる蓬茅の下	君已に輶に乗り氣勢豪なり
此夕溪山對明月	不成長嘯但成嗥	此夕溪山明月に對し	長嘯を成さずして但嗥るを成す

※ 「山月記」本文は、『中島敦全集1』(筑摩書房／二〇〇一年一〇月)によつた。本文の引用に際し、ルビは省略した。